頼春水と古川古松軒

―令和四年度特集展「頼家ゆかりの絵図」から―

川邊　あさひ

令和四年九月八日(木)から十月十六日(日)まで、頼山陽史跡資料館では特集展「頼家ゆかりの絵図」を開催し、頼家に伝来した多種多様な絵図を紹介しました。この展覧会を開催する中で、展示資料の一つである「備中国下道郡南山古墳ノ図」について、関連性の高い絵図が長久保赤水関係資料の中にあるとの貴重な情報をいただきました。その情報を本稿で共有し、今後の展開について言及したいと思います。

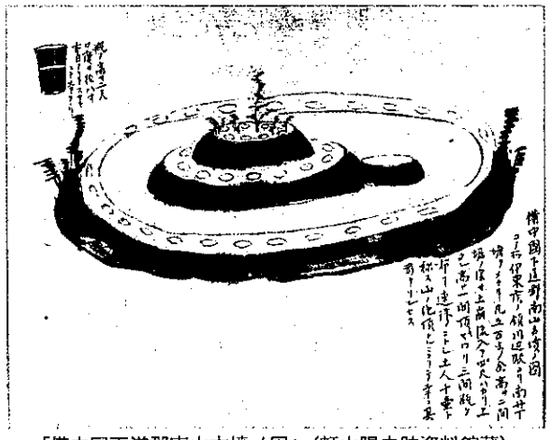
○「備中国下道郡南山古墳ノ図」

「備中国下道郡南山古墳ノ図」は、頼山陽史跡資料館所蔵の広島頼家関係資料（杉ノ木資料）中の絵図の一点です。備中国下道郡川辺駅（現岡山県倉敷市）の南方に位置する「南山古墳」を描いたもので、古墳の図のほか、大きさや堀の深さ、並べられていた「瓶」（円筒埴輪）の図やその特徴などが具に記され、この古墳について正確に記録しようとする作成者の姿勢がうかがえます。

「南山古墳」とは、現在「天狗山古墳」と呼ばれている帆立貝形古墳のことになります。墳丘の長さは五十七mで、倉敷市真備地区の川辺と下二万の境にある南山山塊の北側に突き出た尾根の先端に築かれています。「南山古墳」というのは地元の名称で、古い文献には「千壺古墳」の名前もみえると報告書には記されています[1]。「備中国下道郡南山古墳ノ図」の文字情報をみると、古墳には「瓶」が連珠のように並び、地元の人々は「千壺」と呼んでいたと書かれており、「千壺古墳」の名は円筒埴輪が立ち並ぶ様子からつけられたと推測できます。

本図がだれの手により作成されたかというと、備中国下道郡新本村出身の地理学者・古川古松軒（一七二六―一八〇七）ではないかと考えられてきました。その理由は、古松軒の著書である「吉備之志多道」や「古川反古」に、南山古墳に関する情報が図とともに紹介されているためです。

古松軒は、菅茶山、長久保赤水、木村蒹葭堂など各地の知識人と付き合いがあり、後述のように頼春水もまた古松軒と交流がありました。そのため、本図が古松軒から春水へ贈られていたとしても不思議ではありません。



「備中国下道郡南山古墳ノ図」（頼山陽史跡資料館蔵）

○同じ構図の絵図の存在

特集展を開催中に、本図に関する興味深い情報をご提供いただきました。それは、高萩市歴史民俗資料館の長久保赤水関係資料（重要文化財）の中に、頼山陽史跡資料館蔵のものと同じ構図の絵図（「備中国下道郡南山古墳之図」）があるという情報でした。その図は、常陸国出身の地理学者であり、水戸藩主の侍講を勤めた長久保赤水（一七一七―一八〇一）へ古川古松軒が送ったもので、構図だけでなく文字情報もほとんど共通している点から、当館の「備中国下道郡南山古墳ノ図」も古松軒からもたらされたものである可能性が高くなったといえます。

それでは、頼春水、古川古松軒、長久保赤水の三者は一体どのような関係にあったのでしょうか。館蔵資料を手がかりに探ってみたいと思います。

○頼春水・古川古松軒・長久保赤水

古川古松軒は代々薬種業を営む漢方医の家に生まれ、各地を旅して地理学的な調査を行った人物です。天明七年（一七八七）六十二歳の時に江戸へ下向し、翌年幕府の巡見使に随行して奥羽・蝦夷を旅しており、寛政元年（一七八九）正月には長男とともに老中・松平定信に謁見しています[2]。

寛政元年「孟夏念三日」（四月二十三日）に作成された当館所蔵のある書状[3]には、こうした古松軒の取り組みが紹介されています。その内容をみると、「古川平次兵衛と申一老翁無学ニは候得共、奇男子ニて山水之遊ヲ好ミ、且地理之事考究いたし」と、まず古松軒がいかなる人物なのか説明をしています。「古川平次兵衛」の名の横には、「水戸赤水翁ト水魚ノ交り之由」と小さく書き込まれており、水と魚にたとえられるほど古松軒と長久保赤水は親しい間柄であったことが分かります。そして、古松軒は「去々年」（天明七年）から江戸におり、「去夏」（天明八年）からは幕府の巡見使に随従して、蝦夷辺りまでの地図や紀行を作成し、「今春」（寛政元年）には松平定信に謁見した旨を伝え、「近来之珍事」と述べています。こうした書状から、江戸に来てからの古松軒の活躍に注目が集まっていた様子がうかがえます。

春水と古松軒が対面したのは、右の書状が作成されたおよそひと月後の五月二十一日でした（「春水日記」[4]）。当時江戸にいた二人は、その後も何度か会って話をしており、六月十一日には「遠近計度之述口授」と、測量の方法を春水が古松軒から学んだことも確認できます。各地から人が集う江戸において新たな関係性が紡がれ、知識や情報を得る機会になっていた様子がうかがえます。

長久保赤水と春水の間にも交遊関係がありました。「春水日記」をみると、天明四年（一七八四）二月二十七日に「他出。黒澤右仲・長久保源五兵衛へ学談」と、当時江戸詰だった春水が赤水を訪れており、古松軒の場合と同じく、江戸にて対面を果たしています。

春水から赤水に送った書状の中には、安芸国の郡名の変遷を論じたものがあり[5]、やり取りする中でこうした地理的関心に基づく話を交わすことが度々あったと想像されます。古松軒が赤水へ送った古墳の図が、頼家の資料の中にもみられるのは、春水がこうした地理や地誌に関する知識への探求心を持っていたことが背景にあるのではないかと思われます。

今後、古川古松軒や長久保赤水の研究が進む中で、三者の知的交流の様相が具体的に明らかになっていくことを期待するとともに、春水の江戸における人的ネットワークを、頼家の資料から読み取る作業を蓄積していければと思います。

---

1 岡山大学大学院社会文化科学研究科『天狗山古墳』二〇一四。

2 竹林栄一「古川古松軒史料」（『岡山県立博物館研究報告』第一号、一九七八）・竹林栄一「古川古松軒史料―東行雑記―」（『岡山県立博物館研究報告』第七号、一九八六）。

3 杉ノ木資料Ⅲ―312―16、頼山陽史跡資料館蔵。差出、宛名の記載はないが、杉ノ木資料の目録では西山拙斎が頼杏坪へ送ったものである可能性が示されている。

4 木崎愛吉・頼成一編『頼山陽全書〔附録〕春水日記 梅颸日記』頼山陽先生遺蹟顕彰会、一九三一。

5 高萩郷土史研究会編『続長久保赤水書簡集　現代語訳』（長久保赤水顕彰会、二〇一四）の書簡九十六。

〔付記〕長久保赤水関係資料の「備中国下道郡南山古墳之図」については、長久保赤水顕彰会の会長佐川春久氏からご教示いただきました。また、古川古松軒に関する文献を、竹林栄一氏にご提供いただきました。末筆ながら記して謝意を表します。